

緊急連載 2014ブラジル W杯異聞 ②

初戦を落として、さすがに表情も硬いサムライ・ブルー。ギリシャ戦の試合前、大久保、長谷部、山口、吉田、大迫ら選手たちに笑顔はない。第2戦の舞台ナタルのスタジアムは、やっぱり日本びいきの外国人らで一杯となった。その熱烈ぶりは日本人と変わらず、観客の9割がニッポン・サポーター。

試合はご存じの通り、ギリシャ側は前半、レッドカードで1人を欠き、日本はボール支配率が7割という圧倒的有利な状況ながら、チャンスを生かせず、場内のイライラもヒートアップ。それでもプーイングはなく、ウェーブと歓声による温かな応援ぶり。

とりわけ再三つかんだフリーキックのチャンスには、本田の一発に期待がかかったが、枠を捉えられず。落胆の声とため息が試合終了まで場内を押し続けた。

完成途上のナタルのスタジアムからの帰りは、一般の乗り合いバス。外国人客のほとんどはナタル南部の保養地ボンタ・ネグラ地区に滞在している。すし詰めの46番バス。頬に日の丸のメーキャップの米英人や「必勝」鉢巻きをしたブラジル人らが、悔しさまぎれに車内で大声で歌い出し、ついには「オーレ、オーレ、オーレ」の大合唱。日本人乗客は他におらず、我は、巨体にもまれながら大笑い。試合の鬱憤ばらしをしてくれました。

ボンタ・ネグラは日本で言えば、伊豆・下田の感じ。レシフェが東伊豆・熱海というところか。翌朝、海岸通りを歩くと、やっぱり灼熱の国に来た感じがする。ビーチパラソルの色もまた、ブラジル代表と同じカナリア色が圧倒的に多い。

23日は、そのカナリア軍団が再登場。カメルーンを圧倒的な強さで打ち負かし、決勝トーナメント進出を決めた。盛り上がりにあと一步という感じのワールドカップも、ブラジル戦だけはまるで異質だ。いきなり街が黄色づくめになり、お嬢さんたちの熱烈ネイルも見事。

試合中、町中から人通りが一切なくなり、ゴーストタウンと化す。すべての商店が店を閉め、車も止まる。かろうじて電車とバスは運航しているが、運転手の表情は不満そうな仏頂面だ。

開いているのは飲食店と居酒屋。椅子を並べて、ビールを飲みながら観戦。民家の前にはミニ・パブリックコーナーができて、黒山の人だかり。役所も会社も半ドン扱いで半休日らしい。

チャンスを逃すと花火。ゴールが決まると、さらに凄まじい花火の連発。鼓膜も破られんばかりだ。第2戦メキシコ戦の時、レシフェでMETROに乗り合わせたけど、試合後の電車内は、ラッシュ時なのにご覧の有様。

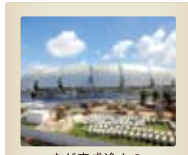
やっぱりブラジルに優勝させてあげたい。日本もかつては、こんな感じだった。高校野球が盛んな千葉・銚子や和歌山・箕島などでは、昭和30~40年代、甲子園の試合当日、人影が消えた。力道山のプロレス放映日も蕎麦屋の前は人だかり。人々はそれを明日へのエネルギーにして発展してきたのだ。ここでは、それがブラジル全土。サッカーはただのスポーツじゃない、と改めて感じさせてしまうのである。



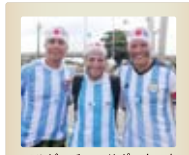
もう負けられぬ、と試合前、真剣な表情の大久保、長谷部、山口、吉田ら



なんとか1点を…再三、本田にフリーキックのチャンス



まだ完成途上のナタルのスタジアム



アルゼンチン・サポーターも熱心に応援してくれたが…



試合前のこの笑顔も帰りに消えてしまって…